

長船省吾氏の詞と辞との区別に 関する論文を読む

「国語学」第二九輯に、長船氏は、「詞と辞とを区別する規準について」と題する詳細緻密な論文を発表されて、私の文法学説における詞と辞との区別の基準を批判された。私は、氏の厚意に對して、甚深の感謝の意を表するとともに、一二の点について疑義を質したく、この小稿を認める次第である。

○ 私が、辞を、概念過程を含まぬ形式と規定したことに對して、長船氏は、「辞は一回限りの心の作用を客体化し概念化しないでそのまま直接に表現するのではない」とし、「第一次の対象を概念化して表現する語が詞である」の對して、「第二次の対象を概念化して表現する語が辞である」とした(一三頁)。私が氏の論旨に對して疑問を感じた一つの点は、例へば、推量の助動詞(だらう)によつて表現される推量作用は、「その所屬する主体・その志向する対象・その行はれてゐる時間的位置・持続時間の長さ等の点で、この作用を他の作用から区別するところの個別性を有する、一回限りの作用である」(四頁)とした点についてである。

時 枝 誠 記

氏が、「だらう」といふ助動詞の意味に、種々の場合を通じて共通した意味が認められるのは、言語主体が、一回限りの心的作用を、一般化・概念化して表現した結果であるとされるのであるが、個々の推量作用が、個別的であり、一回限りであると認める立場は、言語主体の立場であるのか、それとも、第三者的觀察の立場であるのか。私には、氏が、第三者的觀察の立場から右のやうにいはれたのではないかといふ疑問を持つのである。そこから、辞といへども、客体化・概念化の表現であるといふ結論が導き出されたのではないかと推測するのである。主体的立場を、文法学説の基礎とする私の理論においては、推量作用は、客観的には個々において小異があらうとも、主体的立場においては、同じものといふ意識において、これが、「だらう」と表現されるとするのである。前掲四頁の氏の所説に従へば、個々の推量作用は、その主体的意識において既に個別化されて意識されてゐるやうに述べてゐられるのであるが、いかがなものであらうか。

○ 次に、私が、概念化といふ語を使用したことが、あるいは、誤

解の原因をなしたのではないかと惧れる点がある。私の場合は、概念化といふ語は、客体化といふ語と同義語に用ゐられて、ある事柄が対象的に把握されたことを意味する。氏においては、概念化といふことが、一般化と同義語に考へられ(四頁)、また「個別性を棄てて共通性のみを通り出すことは即ち概念化である」(五頁)と規定されてゐるやうに、私が特に強調した、客体的と主体的との差別が、色あせてしまつたのではないか。その結果、辞を、専らその抽象性の度合において詞と対比され、何ら本質的差異を見出すことが出来ないといふ結論に到達したのではないかと思ふのである。

私は、氏の所説を完全に理解したと自負するところには、まだ到達してゐない。本稿は、氏の論文を一読して、「ひよつとしたら」といふ懸念を率直に述べたに過ぎないのである。

因みに、「概念」といふ語は、国語の字面に従へば、共通性の把握の意味に解せられるであらうが、原語の意味に従へば、「表象」という語とともに、「前に置かれたもの」「捉へられたもの」の意味で、対象的把握の意味に近いと見てよいであらう。私の意味はそれに近い。